Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

# NASHIM

Vol.24
2008

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■カザフスタン訪問記～百聞は一見にしかず～
■NASHIMの専門家派遣事業（韓国）に参加して
■在外被爆者健康相談等事業とは？
■韓国医師等へ受入研修を実施

▲ カザフスタン共和国のセミパラチンスク核実験場跡

カザフスタン共和国の北東部に位置するセミパラチンスク市郊外には、旧ソ連時代に核実験場が存在しました。ここでは1949年から1989年までの40年間にわたって、空中、地上、地下を含めた450回以上の核実験が行われ、約170万人の住民が住む周辺30万4000平方キロメートルの土地に放射性降下物の拡散と影響があったといわれています。

NASHIMでは、これまでに受け入れた研修者のフォローアップや関係機関との調整・意見交換のため、チェルノブイリ関連国及びカザフスタン、韓国などへ専門家を派遣しています。9月にはカザフスタン共和国と韓国への派遣を実施しましたので、今号は、現地へ行っていただいた兼松教授、関根教授の報告を中心に掲載します。

# カザフスタン訪問記

## “百聞は一見にしかず”

長崎大学大学院
医歯薬学総合研究科
移植・消化器外科
教授　兼松　隆之

### ■ カザフスタン共和国とNASHIM

NASHIMからの派遣で2008年9月5日(金)から9月13日(土)にカザフスタン共和国を訪問しました。今回は長崎大学原研施設長の山下俊一教授、同原研Serik Meirmanov先生、Ainur Akilzhonova先生、林田直美先生、長崎大学医学部・歯学部附属病院の林徳真吉先生、熊谷敦史先生、国立病院長崎医療センター外科の前田茂人先生、長崎県原爆被爆者援護課の福田恵子さんと私の総計9人での訪問でした。

NASHIMは1996年8月から旧ソ連時代の核実験によって被爆に関する問題を抱えているカザフスタン共和国のセミパラチンスク医科大学の研修生の受け入れ事業を開始しました。これまでNASHIMからカザフスタンへの専門家派遣は15名、受け入れ研修生は19名にのぼっています。

### ■ AlmatyからSemeyへ

9月5日(金)早朝、長崎を高速バスで一路福岡空港へ。そこから韓国仁川空港を経由して、夜半カザフスタンのAlmaty空港に到着しました。日本との時差は3時間です。翌6日(土)にAlmatyを出発し、空路Semeyに向かいました。この飛行機は小型の古い型で、まるで乗り合いバスといった感じです。チェックインカウンターで預けた荷物は飛行機の搭乗階段の下に置かれていて、各自が機内に持ち込む形式になっていました(写真1)。飛行時間は約2時間。窓側席は飛行機が高度を上げた時には、外気温が伝わり壁が凍りつくように冷たくなります。落ちないことだけを祈りつつの2時間でしたが、どうにか無事にSemey空港に降り立ちました。

写真1：機内の様子

### ■ 旧ソ連時代の核実験場(ポリゴン)見学

7日(日)は49～62年にかけて核実験が繰り返し行われたクルチャトフを見学しました。穴だらけのひどい道を、ライトバンはバウンドしながら進み、約3時間でクルチャトフに到着しました。そこは核実験のために作られた秘密都市で、そこでは核実験に関する博物館を見学しました(写真2)。

写真2：博物館での見学

それから再び車で約1時間かけてポリゴンの中心地へ。小高い丘に差し掛かり、突然、目の前に大きな湖が広がりました。幅400メートル、深さ200メートルの湖は核実験のためにできた大きな穴です（写真3）。乾燥しきった平原の中の湖の輝きは美しく、事情を知らない兵士たちがこの地を訪れ、しばしこの湖で泳ぎを楽しんだこともあったそうです。それにしてもこの地ではいまだに放射線が放出しており、ガイガーカウンターの針は大きく振り切れていました。核実験当時、この地域には遊牧民が住んでおり、甚大な被害を人体に与えた歴史がここにあります。

写真3：核実験によってできた湖

## ■ Semey医科大学での講義と長崎賞の授与

8日（月）Semey医科大学で私が「長崎の医学の歴史とNASHIM活動」、山下教授がGrobal COEの業績についてそれぞれ講演しました。それからSemey医科大学の2名の優秀な学生に「長崎賞」を授与しました（写真4）。

午後からはセミパラチンスクがんセンターと診断センターを訪問し、スタッフと意見の交換を行いました。その夜は、Semey医科大学主催の夕食会に全員招かれました。

写真4：長崎賞受賞の学生さん

## ■ がんセンターでの臨床現場の経験とセミパラチンスク市長からの感謝状

9日（火）前田先生が甲状腺腫瘍の摘出手術を担当し、私も一緒に手術に参加しました。前田先生はもうこの10年来、カザフスタンを訪問して医療活動をおこない、前田ファンも多く、たくさんの医療相談も受けていました。

同日の夜、NASHIM主催の夕食会が開かれました。Semey医科大学、がんセンター、診断センターのスタッフ、元NASHIM研修生などが参加し、楽しいひと時を過ごさせてもらいました。同席でセミパラチンスク市長からのNASHIMに対する感謝状を贈呈されました(写真5)。

写真5:NASHIM主催の夕食会

## ■ 再びAlmatyへ

10日(水)“あの”飛行機に乗り、Almatyへ戻りました。同日の午後、山下教授はカザフスタン医科大学で放射線と甲状腺癌に関する講演を行い、私は別に国立外科センターに行き「肝切除」の講演を行いました。

11日(木)日本大使館に表敬訪問した後、日本人墓地に参拝しました。第二次世界大戦後、ロシアに抑留された日本人兵士が再び祖国へ帰ることなく、その地で落命されたことの無念はいかばかりであったろうと考えると、胸が詰まりました。

その後、山下教授は原研病理に長年留学経験のあるGabit先生が勤務する私立医科大学とAl-Farabi Kaz国立大学で講演し、聴衆に多大の感銘を与えました。

## ■ カザフスタンからの帰国

12日(金)市内を展望できる山の上の公園コクトベでピクニックを楽しみました(写真6)。その日の夜にAlmaty空港を出発。韓国、福岡を経て、13日(土)に長崎に戻りました。

## ■ 結びに

この度、カザフスタン訪問の機会を与えていただき、NASHIMの関係の皆様に心からの御礼を申し上げます。この国を訪問して、「百聞は一見にしかず」という諺を実感しました。異文化の中、日本語はもちろんのこと、英語も通じない国で、今日まで活動と支援を続けてこられた山下教授並びにそのご一門の方々のこれまでのご苦労の大きさが、真にしのばれました。ほんとうに頭が下がる思いです。今後、さらにNASHIMの支援がこの国におけるヒバクシャ医療の推進に貢献できることを痛感した次第です。

写真6:コクトベから見たAlmaty市

# NASHIMの専門家派遣事業（韓国）に参加して

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
原爆後障害医療研究施設
原研病理 教授　関根　一郎

2008年度NASHIM専門家派遣事業（韓国）に、9月22日～25日私と医学部保健学科の中尾優子准教授が参加した。われわれ二人の目的はソウルにある大韓赤十字看護大学での講演であった。

大韓赤十字社特殊福祉事業所を訪問

今回は10回目となる在韓被爆者健康相談事業について韓国側と相談するため訪韓する大学附属病院・国際ヒバクシャ医療センターの副センター長、大津留　晶准教授らと同行しての訪韓であった。一行は関根、中尾、大津留、ほか附属病院精神神経科木下裕久先生、越本莉香さん、県の原爆被爆者援護課保健医療班の山口勇次氏の6名であった。

ソウルのホテル到着後、直ちに徒歩15分の大韓赤十字社特殊福祉事業所を訪問した。まず、申（シン） 東寅（ドンイン）所長、金（キム） 東洙（ドンス）庶務課長らに訪韓の挨拶をした。所長・課長とも人事異動で着任早々であったが、長崎と韓国の相互事業に深い関心を示してくれた。関根、中尾はそこで退席し、大津留先生らは韓国側と在韓被爆者健康相談事業の業務協議に入った。赤十字社福祉事業所には担当職員の呉（オ） 尚恩（サンウン）さん、柳（ユ） 印宣（インソン）さん、梁（ヤン） 信惠（シンヒェ）さんと相談員の徐（ソ） 敏姫（ミンヒ）さんの4名の若い女性がおり、いずれも通訳として通用するほど日本語が堪能で、今回の訪韓でも何かと私たちをサポートしてくれたが、日頃の彼女らの協力のお陰で、NASHIMの韓国での事業や在韓被爆者健康相談事業がスムーズに行われていることがよく理解できた。

24日は朝から大韓赤十字社特殊福祉事業所を訪れ、通訳と2時間にわたって講演の内容の確認を行い、午後ソウル市鐘路（ジョンロ）区にある大韓民国赤十字看護大学を訪問した。

まず大学長である金（キム） 慕妊（モイム）先生にお会いした。金慕妊先生は大韓民国における看護教育・実践の第一人者的存在であり、国際看護協会(ICN)会長や、大韓民国延世大学大学学長、大韓民国赤十字社副総裁などを歴任されたと聞いていた。学長室には蘭の鉢植えがところ狭しと置かれ、先生の花を愛する人柄が偲ばれ、花の写真を趣味としている私としてはとても嬉しい出会いであった。金先生が「もうしばらくすると定年になるので、済州島の花を見に行くのが

赤十字看護大学長と面会

楽しみだ」とまず語られ、「私も済州島を訪れたい」、「それでは一緒に・・・」楽しい会見であった。

左から中尾准教授、関根教授、金慕妊学長

われわれの講演に先立ち、長崎県庁で勤務経験のある特殊福祉事業所の呉　尚恩さんが長崎市と長崎原爆について紹介を行った。中尾准教授の講演は「日本における産後の乳房ケアについて」と題するもので「現在、日本で実施されている産後の授乳サポートは、早期授乳を含めたカンガルーケアが主流になってきている。その後の乳房ケアについて施設内で実施されている方法は、基底部剥離、乳頭・乳輪をソフトに保つためのマッサージ法、乳頭の痛みや損傷のトラブルを改善する適切なポジショニング、ラッチ・オンである。産後の母親への乳房ケアは身体のみではなく心のマッサージ、エモーショナルサポートが重要であり、児に対しても相談する姿勢が必要である。」が要旨であった。助産師の資格を有し海外活動経験の豊かな中尾先生の講演は好評で、看護師のたまご達は熱心に聞き入り、講演後次の私の講演時間がなくなるのではと心配になるほど質問が相次いだ。

花の写真を交えて講義を行う関根教授

私は「長崎原爆の医学的被害」と題して「被爆都市長崎の歴史、世界で唯一の被爆医科大学としての長崎大学医学部について、原爆の理論、原爆の破壊力と熱線、放射線が生体に及ぼす影響、急性原爆症の医学的説明、原爆後障害としてのがんの多発や重複がんの増加について述べ、『長崎市は世界で最後の被爆都市でなければならない、そのために人類の負の遺産として原爆被爆者の医学的被害の結果をまとめ上げ後世へ残さねばならない。また被爆者が日本人だけでなく外国人も含まれ、なかでも韓国人が多かったことを決して忘れていない』ことを強調し」講演を終わった。趣味の花の写真を多数介在させての講演であったが、皆さんが熱心に聴講していることが、肌で感じられ嬉しかった。

講演が終わって一人の男子学生が近寄ってきて、「私は日本人の学生です。この看護大学で学んでいます。広島出身なので先生の話はとても興味深かったです。」国際化社会に生きる日本の若者に出会えて今回の訪韓に花を添えていただいた感じがした。

今回の訪韓では最初の2日間は大津留先生らと接触でき、日本の厚生労働省委託の在外被爆者支援事業の一環としての在韓被爆者健康相談事業を多少理解することができた。本事業は2004年に開始、これまでに9回にわたって韓国内15箇所において健康相談事業を行い、総計で2228名の事前健診参加者と1863名の相談事業参加者があったという。

韓国でのNASHIMの事業が健康相談事業と両輪の轍(わだち)を刻みつつ、韓国被爆者支援を促進し、日韓友好の絆をより堅固にしていくものであってほしいと願いつつ、帰国の途についた。

# 在外被爆者 健康相談等事業とは？

日本国内に居住地及び所在地を持っていない在外被爆者の健康保持と増進を図ることを目的に、治療のための渡日や医療費の助成などの支援が国により行われています。

日本の医師が現地へ出向いて被爆者から健康相談を受ける健康相談等事業は、この支援の一環として行われ、韓国では陜川郡(ハプチョン)を皮切りに2004年から実施されています。今年度もこれまでと同様、2地域(ソウル特別市、大邱広域市)で実施されました。

関根教授の報告の結びに「韓国でのNASHIMの事業が健康相談等事業と両輪の轍(わだち)を刻みつつ、韓国被爆者支援を促進し･･･」という一文がありましたが、今後はこの健康相談を徐々に韓国の医師が中心となって実施できるよう、NASHIMで行っている医師等の受入研修や専門家を派遣して開催する被爆医療の講義等により、韓国側の病院関係者に理解を深めていただいています。

▲韓国での健康相談等事業の様子。
11月に行われた大邱広域市での健康相談等事業では、長崎から派遣された7名の医師が5日間にわたって韓国の被爆者304名から健康相談を受けました。

受入研修事業（9月～10月）

# 韓国医師等へ受入研修を実施

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる6名の関係者を招いて、受け入れ研修を実施しました。研修者は9月28日に来崎し、事務職3名は10月2日まで、医療職3名は10月4日まで長崎に滞在して、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や、長崎大学、放射線影響研究所などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ、被爆の実相についても学びました。

平和案内人嶺川さんの案内で
原爆死没者追悼祈念館を見学した研修生ら

## 研修後の感想

### ソウル赤十字病院（内科）　姜秉局（カンビョングク）　医師

今回の研修は、原爆被爆者の実情をより詳しく学ぶ機会となり、二度とこのような原爆の被害が地球上で起きてはいけないと思いました。在韓被爆者をより深く理解したうえでの診療ができる契機になったと思います。

### ソウル赤十字病院（内科）　安泰弘（アン テホン）　医師

研修を通して、原爆被爆の実相と被爆者の痛みを感じることができました。今後もナシムの尽力によって長崎の犠牲と涙が無駄にならないことを祈願するともに、もう一度長崎を訪問したいと思います。

### セソウル内科医院（家庭医学科）　崔日薫（チェ イル フン）　医師

長崎の被爆者の状況や彼らに対する健康管理などを知ることができ、とても有意義でした。特に長崎大学での講義は豊富な視覚的資料を使って行われ、理解しやすかったです。歓迎していただき、ありがとうございました。お互いの友情が深まることを期待します。

### 大韓赤十字社特殊福祉事業所（庶務課）　金東洙（キム ドン ス）　課長

63年前の原爆投下の痛みを克服し、被爆者のための様々な活動が積極的に行われていることに感銘を受けました。被爆者に対する認識を深めることができたので、今後、彼らのためにやるべきことについて考えたいと思います。

### 大韓赤十字社特殊福祉事業所（庶務課）　徐敏姫（ソ ミン ヒ）　さん

行政機関と医療機関がひとつになって支援を行っており、被爆者が残りの人生をより安心して幸せに暮らせるように、また、二度と被爆者という犠牲を作らないようにとの皆さんの努力を感じました。研修で得たことを活かし、今後は被爆者に共感して接することができそうです。

### 大邱赤十字病院（院務課）　李菊子（イ グクチャ）　さん

長崎原爆資料館などを訪問しながら、当時の惨状が絵のように頭に浮かび、両国にとって原爆は悲劇的な現実だったように思いました。研修を通して、放射線の健康影響について十分な知識を得ることができました。韓国に帰ってからは被爆者に接する心が新しくなりそうです。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第24号
発行／平成21年1月15日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail n_admin@nashim.org